

東教育財団だより

財政基盤の弱体化

東教育財団では、基本財産二億七千万円を国債と地方債で運用し、公益認定を受けて公益財団法人として再出発した平成二三年度から平成二八年度までの六年間は、毎年度約三千八百万円の運用収益を得てきました。

ところが、長引く経済不況を克服するため、大幅な金融緩和が進められ、超低金利政策(平成二八年二月から「マイナス金利」政策)がとられており、全国の財団が運用収益の減少を危惧しています。

当財団においても、保有する第一回共同発行地方債(額面金額五億円 利率一・九〇%)が平成二九年六月二三日に満期償還となるため、平成二九年度の運用収益が減少することは避けられません。

資金運用及び助成事業

検討委員会の開催

そこで、前回の『財団だより』でもお知らせした「資金運用及び助成事業検討委員会」を二度にわたって開

催し、先ず、七月七日の第一回検討委で超低金利状況下における資金運用のあり方を、次いで、八月三日の第二回検討委で運用収益減が見込まれる平成二九年度の助成事業のあり方を検討しました。



▲ 第一回検討委にオブザーバー参加された顧問の三谷英彰公認会計士

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2-2-11 堺筋本町
西尾ビル6階
電話06(6262)7363
発行責任者 長谷隆雄

第五一回共同発行地方債の

満期償還後の運用方針

【抽象】

◇その時点で、最善と考えられる方法により運用する(資金運用規程第四条)。

【具体】

◇平成二九年六月時点の運用においても、現下の債券金利状況を前提とせざるを得ない。

◇国債又は地方債で運用を続けるとして、

新発債は、一〇年債で利率〇・〇七%以下であり、五億円の資金を一〇年間にこのような低金利で固定することは得策ではない。

既発債は、新発債より若干高い利回りを期待できるが、債券単価が百円を超え、持ち出しが必要となる。

◇リスクが低く、運用利回りが公債より高い企業債等で運用するとして、

平成二九年六月二三日、この条件を満たす五億円の金融商品が市場に存在し購入できる保証がない。

◇したがって、当面、銀行に定期預金し、債券市場を見守ることとする。

運用収益減が見込まれる

平成二九年度の

助成事業のあり方

平成二九年度の運用収益が平成二八年度に比し約六四〇万円減少すると見込まれるので、平成二九年度の助成事業に係る予算は、平成二八年度助成予算額から概ね三割を減じた額の範囲で計上し、これにより充足できない運用収益減少額は、管理費の節減により賄う。

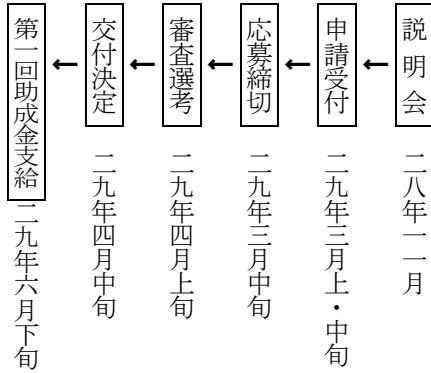


(第二回検討委の会議風景)

平成二九年度助成事業 募集要項が決まりました

一〇月七日開催の中間理事会において、平成二九年度助成事業を次の要領で募集することを決定しました。

一、事業実施時期



二、助成対象団体及び事業

平成二八年度と同じ

三、助成額

平成二八年度助成額から概ね三割を減じた額

助成事業の紹介

平成二七年度に助成した事業の具体例を紹介します。

❖ 学校教育事業助成

「子育て・親育ち活動」



愛珠幼稚園では、園が所有するリードオルガンやバイオリンを使って、親子で参加できるコンサートを企画し、本物の音色や美しい調べを味わい、共に感性を磨く機会とした。また、親子で野菜などの栽培活動に取り組み、命や食の

大切さを感じる機会とした。

(助成額二〇万円)

「ICT活用事業」

南大江小学校では、授業にICTを活用する取組みが進められており、デジタル教科書の導入が図られ、パソコン、プロジェクト、電子黒板、タブレット端末の利用も広がり、全ての児童により分かりやすく授業が行われるようになった。

(助成額三〇万円)



❖ 社会教育事業助成

「区民の体づくりとスポーツ

レクリエーションの振興事業」



中央区スポーツ推進委員協議会では、①区長杯ソフトバレーボール大会 ②ファミリージョギング大会 ③ニュースポーツ講習会等を開催し、区民のスポーツとレクリエーションへの理解・認識を深めるとともに、区民相互の親睦と連帯感を高めた。

(助成額五〇万円)

☆ 生涯学習事業助成

「中大江小学校生涯学習ルーム」

バールンアート、ハンサムウオーク(歩き方・写真Ⅱ右)、手打ちうどん(親子クッキング・写真Ⅱ左)、熊野街道を歩く等の事業を通じて、学校や地域との連携、世代間の交流を深めた。

(助成額一〇万円)



☆ 地域文化事業助成

「中央区民まつり」

毎年一〇月の第三日曜日に、子どもから大人まで誰もが気軽に参加して楽しめる、区民の創意・工夫を凝らした手づくりの区民まつりを開催し、温かい心と心のふれあう連帯感とわがまち意識を高めるとともに、失われがちな伝統行事や催しを掘り起こし、地域文化の振興を図っている。

(助成額二〇万円)



「中央区民文化のつどい」

毎年二月、区民センターにおいて、絵画・書・写真など目頃の創作活動を展示する作品展(写真Ⅱ左)と多様な年代の区民が練習してきた成果を発表できる舞台発表会(写真Ⅱ右)を開催し、区民文化の振興に寄与するとともに、観覧者と発表者のコミュニティの輪が広がり、まちづくりの推進にも役立てている。

(助成額二〇万円)



「あったか北大江まち祭り」

地域コミュニティの核であり、一時避難所でもある北大江公園において、地域の生活魅力の向上や自主防災活動の推進に役立つイベント(木工・食料づくり・救助・消火体験等)を開催し、地域への興味や愛着を深めるとともに、地域の災害に対する備えを充実させた。

(助成額一五万円)



おおさかべんおもろうこう 大阪弁面白考

— ことばは文化 —

人は、ことばでものを考える。自分の思いを伝えるのに、身振りや手振りを使うこともあるが、ことばの方が断然有力である。人との交流に目を使う(眼で訴える)こともあり、「目は口ほどにものをいい」ともいうが、やはりことばの方が自在である。

だから、ある地域のことばの特徴は、その地域の人々のものの考え方や感じ方、自己表現の仕方や人との接触の仕方の特徴であるといえる。別の言い方をすれば、文化がことばのあり方を規定し、逆にことばのあり方がその地域の人々の気持ちの動き方を規定するともいえる。

大阪のことば―大阪弁に関していえば、大阪人の思考様式、自己表現様式、行動様式、対人接触様式の現れであり、大阪弁は大阪というまちの文化の現れである。

ところで、大阪は海に向かって開

かれたまちで、難波は日本最古の国際交流都市として栄え、古代から渡来人や外来文化を受け入れてきた。中世後期の大阪は蓮如がつついた寺内町に始まり、江戸時代には「天下の台所」と呼ばれ、経済の最先端都市であった。このような地勢と歴史を持つ大阪の文化には、「開放性」「合理性」「敏捷性」の三つの特徴があるといわれる。では、大阪弁にはこの三つの特徴がどのように具現されているのか。

一般に日本人は欧米人に比べて人見知りする傾向が強いが、開放的な大阪人は必ずしもそうではない。ことばを上手に道具として使い、知らない人にも直ぐに話しかける。大阪人は日本人離れしている。欧米的である。

大阪人は、自分と相手との間に距離があるとか、壁があるとは考えない。だから、知らない人とも直ぐ話ができる。

大阪人は、自分の気持ちを語ることばと相手に向って働きかけることばを画然と区別しない。相手のことも「自分」と呼ぶように、

自分と相手との関係に距離があるとは考えず、言うべきことは言うが、相手との共感的な関係もちやんと維持する。

また、相手が退屈しないように、それでいて喋っている自分の肩がこらないように、楽しく面白く話したいという笑い指向の体質があり、大阪人は会話の中に笑いの要素を含ませることを好む。加えて、大阪弁自体が笑いに向いたことばでもある。

大阪人は、もってまわって恰好つけて、かしこそうにもの言うことを、照れくさがり恥ずかしがる。話は分かりやすいのが一番大事と、ホンネで喋って合理的である。だから、無意味なことに理屈を言いたてたり、

建前を並べて遠回りするのを嫌う。

大阪人は、『その場で絵をかく』臨機応変の対応を尊び、状況に応じて的確に切れ味よく大量にことばを繰り出す敏捷さを持つ。

つ。饒舌が嫌われることなく、寧ろ喜ばれ、洗練されたマナーとウィットをもつて自己主張することが歓迎される。

大阪人は、自分と相手との間に沈黙や気まずさが生じることを許せず、停滞を嫌い、変化を好む。欧米人も沈黙を嫌い、『即答の文化』ともいべき習慣を持つていて、相手が黙りこんでいると、イライラする傾向があるようで、ここでも大阪人は日本人離れしている。欧米的である。

(槇野 勝・記)

※このコラム欄への投稿を募ります。
テーマは「おおさか」です。二五〇〇字程度でお願いいたします。



→大阪市立開平小学校の南西角に立つ石碑横面に「天王寺屋五兵衛と平野屋五兵衛大きな両替商が向かい合わせに店を構えていたので、合せて十兵衛」と説明書き